ギュイヨン夫人とバルザックにおける幼子イエスの信心

大須賀沙織

はじめに

17世紀フランスの神秘思想家ギュイヨン夫人（Jeanne-Marie Bouvier de La Mothe［Motte］Guyon, 1648-1717）は、内的祈りと内的信仰のあり方を説き、19世紀の小説家バルザックに多大な影響を与えたが、その一方で、幼子イエスを特別に崇敬し、幼子イエスの信心会を形成するという外的で活動的な一面も持っていた。本論では、Ⅰ. キリスト教の伝統の一つである幼子イエスへの信心がギュイヨン夫人においてどのようなかたちで表れたか、Ⅱ. ギュイヨン夫人の著作を読み、思想を吸収していたバルザックが、幼子イエスをどのように捉え描いていたかを考察する[1]。

---

[1] 本論は、2017年11月、上智大学中世思想研究所主催シンポジウム「キリスト教霊性の本質」（於 上智大学）で行った発表「ギュイヨン夫人の霊性―幼子イエスにならいて」と、2017年12月、東京バルザック研究会（於 東京外国語大学）で行った発表「ギュイヨン夫人からバルザックへ―幼子イエスの信心をめぐって」をもとに、加筆修正を行いまとめたものである。ギュイヨン夫人における幼子イエスというテーマは、上智大学中世思想研究所からご提示いただいた「キリスト教霊性の本質」という題目について黙想する中で浮かんできたものであった。キリストにならってへりくだること、自らをむなしくし、無とすることによって、神的生命に与かりゆくこと、そしてそこには人間の身体性という問題も絡んでくること…。人間の弱さ、みじめさ、そして身体性ということを考えると、まずは十字架の、受難のキリストが浮かんでくるため、「幼子」という視点は論者自身にとっても思いがけないものであったが、ギュイヨン夫人の霊性の本質を発見する契機となった。発表の機会を与えてくださった上智大学中世思想研究所と東京バルザック研究会に心より御礼申し上げます。

Ⅰ．ギュイヨン夫人における幼子イエス

Ⅰ－1．ギュイヨン夫人：誕生からサヴォワ滞在期まで

ジャンヌ＝マリー、のちのギュイヨン夫人は、フランス中央部のモンタルジという小さな町で生まれ育った。両親は敬虔なカトリック信徒で、ジャンヌはウルスラ会、ベネディクト会、ドミニコ会に預けられながらごく自然に信仰心を育んでいく。16才で結婚するが、修道女になることを欲していた彼女が、夫と姑からたえずいびられ悩まされる結婚生活に幸福を感じられるはずはなかった。神を模索していた19歳のとき、フランシスコ会修道士アルカンジュ・アンゲラン（Archange Enguerrand, 1631-1699）という人物に出会い、次のような言葉をかけられる。「あなたは、ご自分の中にお持ちのものを外に探しておられます。あなたご自身の心の中に神を探し求めなさい。そうすれば神を見つけられるでしょう[2]。」この言葉が矢のように彼女の胸に突き刺さり、深い傷、しかし甘美な愛に満ちた傷を負う。このフランシスコ会修道士をとおして、彼女はベネディクト会修道院長ジュヌヴィエーヴ・グランジェ（Geneviève Granger, 1600-1674）と知り合う。グランジェ修道院長は、結婚生活に苦しみ、心の闇に陥っていたジャンヌを励まし支えた優れた人物であったが、彼女はのちにジャンヌを幼子イエスに捧げる霊的婚姻を行わせ、ジャンヌを新たな道に方向づけることとなる。ギュイヨン夫人が28歳のとき、夫が亡くなり、家庭の束縛から解放された彼女は、使徒的活動に身を投じていく。ギュイヨン夫人は宗教改革後のフランスで聖母訪問会（Ordre de la Visitation）を創立したフランソワ・ド・サル（François de Sales, 1567-1622）とジャンヌ・ド・シャンタル（Jeanne de Chantal, 1572-1641）の教えと生き方に深い共感を抱いており、聖書と『キリストにならいて』とともに、フランソワ・ド・サルの『信心生活入門』と『神愛論』を読んでいた[3]。また、彼女は常に司祭、修道士、修道女たちとの交流の中に生き、同時代人との対話や文通をとおして信仰生活を深めていった。1681年、33歳のとき、彼女はジュネーヴ近郊の町ジェクスに向けて出発する。そこは、改革派からカトリックへの改宗を望む子女の教育を担うヌーヴェル・カトリックの活動が準備されている場所であり、資金としてギュイヨン夫人の莫大な寄付金があ

---

[2] *La Vie par elle-même*, t. I, p. 197.

[3] *La Vie par elle-même*, t. I, p. 137, 182, 232.

てられ、ギュイヨン夫人は修道女たちとともにジェクスに到着する。しかし当初から彼女は自分の召命は別のところにあることを自覚しており、ヌーヴェル・カトリックの活動への不信も募り、亀裂が生じていく。ジェクスからほど近い、レマン湖畔のトノンはエヴィアンの隣に位置し、フランソワ・ド・サルが宣教活動の拠点の一つとしたことでも知られているが、彼女の指導司祭となるラ・コンブ神父（François La Combe, 1641-1715）がバルナバ会修道院長として活動する地でもあった。３人の子供の母でもあったギュイヨン夫人は、一番下の娘をトノンのウルスラ会修道院に預けており、1682年、彼女自身もこの地に移り、２年を過ごすことになる。1682年の復活節のことと見られるが、ラ・コンブ神父の指導の下、黙想を行っていた彼女の中に、書くことへの激しい衝動が生まれ、自動筆記の状態で『奔流』を書き上げる[4]。本論で取り上げる『イエスの幼年期信心会の規則』は執筆時期が定かでなく、モンタルジ時代にすでに自身のメモのようなかたちで書かれていたとも考えられるが、完成版が作られたのがこのサヴォワ滞在期であったのではないかと推測される[5]。

Ｉ－２．ギュイヨン夫人における幼子イエスの信心[6]

『イエスの幼年期信心会の規則』というタイトルからうかがえるとおり、ギュイヨン夫人はイエスの幼年期を特別な崇敬の対象とし、信心会のようなものを形成していた。このような信心を持った背景には、幼子イエスを崇敬するカトリックの伝統があった。

福音書では、マタイと、そしてとくにルカによって、ベツレヘムの馬小屋での誕生から、ナザレで両親に仕えて暮らしていたというところまで、ごく手短に幼子イエスに関する記述がなされている（マタイ２章、ルカ２章）。主のご公現とご降誕は早い時期に典礼の中に取り込まれていくが、幼子イエスへの信心が明確に表れてくるのは中世になってからである。たしかにそれは、具体的な目に見えるかた

4　*La Vie par elle-même*, t. I, p. 517-518.

5　Marie-Louise Gondal, *Le Moyen court et autres récits*, Introduction, p. 24.

6　*Dictionnaire de spiritualité*, Beauchesne, t. 4 , 1960, « Enfance de Jésus（Dévotion à l'）», p. 652-682 ; « Enfance spirituelle », p. 682-714.

ちをとおして信仰を育んだこの時代の産物であったように見える。まず、聖ベルナール（Bernard de Clairvaux, 1090-1153）が説教の中で行ったイエスの幼年期に関する解説がシトー会の霊性の中に入っていく。そして、アッシジのフランチェスコ（François d'Assise, ca 1182-1226）は、福音書と聖ベルナールの教えをもとに、ご降誕の神秘とクレッシュ（キリスト生誕群像）の信心を深め、この信心が人々に伝播していった。16世紀には、イグナチヨ・デ・ロヨラ（Ignace de Loyola, 1491-1556）が『霊躁』においてイエスの幼年期を黙想させており、そして17世紀に、幼子イエスへの信心が飛躍的高まりを見せることとなる。大きな役割を果たしたのは、ピエール・ド・ベリュル枢機卿（Pierre de Bérulle, 1575-1629）という人物である。彼はオラトリオ会をパリに創設し、カルメル会をフランスに導入した人物であるが、イエスの幼年期を非常に大切にした一面があった。「イエスの幼年期」（l'Enfance de Jésus）という表現そのものの普及にも貢献しているようである。ベリュルは、幼子イエスの行為や出来事よりも、イエスの幼年時代の「状態」に目を向け、その無垢、純粋さ、弱さ、両親への従属と依存、謙遜、沈黙といった幼子のありようにならうことを教えた。ベリュルの指導の下、オラトリオ会、カルメル会の信心に浸透していき、とりわけカルメル会修道女たちの信仰に深く根付いていく。カルメル会では、イエスのカトリーヌ（Catherine de Jésus, 1589-1623）や、ボーヌのご聖体のマルグリット（Marguerite du Saint-Sacrement, 1619-1648）といった、神秘体験によってイエスの幼年期の状態が心に刻まれる修道女が現れている。ボーヌのマルグリットは、幼子イエスの行いを黙想し、「聖なる御子の王冠」と呼ばれるロザリオを唱え、毎月25日を祝うというように、ベリュルの教えをより具体的に実践した。

17世紀前半のこうした流れがあり、ご聖体のマルグリットが亡くなるひと月前に、ギュイヨン夫人が生まれている。ギュイヨン夫人が幼少期を過ごしたのはウルスラ会、ベネディクト会、ドミニコ会の修道院であったが、カルメル会以外の女子修道会にも伝播していたと見え、幼子イエスへの信心をごく自然に育んでいた。7歳頃、ジャンヌが入れられていたウルスラ会修道院には、中庭の奥に、幼子イエスに捧げられた礼拝堂があった。幼子イエスへの信心を持つようになった少女ジャンヌは、毎朝自分の朝食を運んでは、幼子の聖画の背後に隠していた。それは、朝食を抜くことで幼子イエスにできる限りの犠牲をお捧げしたいという、少女ジャンヌ

の素朴な熱い思いからなされたことであった[7]。

貧者と病者に大きな愛を抱いていたギュイヨン夫人は、結婚後も、施し、貧者と病者の訪問と世話、子供たちへの牛乳の提供などを日常的に行い、クリスマス前後には、彼女の「愛の中心にまします幼子イエスのため、子供たちへの奉仕を倍加していた」[8]。そして決定的な出来事は、ギュイヨン夫人が幼子イエスと霊的婚姻の契約を交わしたことである。1672年７月は、24歳のギュイヨン夫人にとって、愛する父と娘を同時に亡くした深い悲しみの月であった。７月22日、マグダラのマリアの祝日の前日、ギュイヨン夫人を案ずるグランジェ修道院長は何らかのインスピレーションを受け（彼女はギュイヨン夫人の幼子イエスへの愛を当然知っていたのだろう）、ギュイヨン夫人に小さな契約書を送り届ける。ギュイヨン夫人はグランジェ修道院長の指示に従い、その日は大斎（食事制限）と特別な施しを行い、翌日、マグダラのマリアの祝日の朝、指輪をはめて教会に行き、ご聖体を拝領する。家に戻ると、聖母に抱かれるイエスの聖画が飾られている自室に上がり、幼子の足元で契約書を読む。そこに記された誓いの言葉は、「われ、伴侶としてわれらの主なる幼子を受け、われ卑しき者なれど、わが身を主なる幼子に捧げ奉る」というものであった。ギュイヨン夫人はイエスに、婚姻の贈り物として、十字架、軽蔑、混乱、恥辱と屈辱をお与えくださいと求め、また、この婚姻をとおして、幼子と同じ心の状態、小さき者となり、自己を無とする状態に入らせてくれるよう願う。契約書に署名し、幼子に自分の指輪を捧げたギュイヨン夫人は、それ以後、幼子イエスを聖なる夫とし、生きていくことになる[9]。

ギュイヨン夫人は生来病弱で、生涯さまざまな病気に見舞われることになるのだが、1681年、ジェクスでも長引く高熱と肺炎、消化不良で衰弱し、危篤に陥っていた。聴罪司祭のラ・コンブ神父が呼ばれ、彼の按手と祈りにより奇跡的に回復、ギュイヨン夫人はラ・コンブ神父とともにトノンに赴き12日間の黙想を行う。この黙想の間、ギュイヨン夫人は貞潔、清貧、従順、教会への服従、イエスの幼年期の崇敬という５つの終生誓願を立てている[10]。この誓願はギュイヨン夫人が考えて立

---

[7] *La Vie par elle-même*, t. I, p. 119–120. Yvan Loskoutoff, *La Sainte et la fée*, p. 78.

[8] *La Vie par elle-même*, t. I, p. 288–289.

[9] *La Vie par elle-même*, t. I, p. 300–301. Yvan Loskoutoff, *La Sainte et la fée*, p. 79.

[10] *La Vie par elle-même*, t. I, p. 436–438.

てたものではなく、神に身を委ねた彼女の内面から湧き出たものであり、幼子イエスへの誓願の効果は、彼女自身驚くようなかたちで表れ、実践されていく。幼子イエスを崇めること、それは彼女にとって「幼子イエスを宿すことであり」、自らも幼子の状態に身を置くことであった。それ以前から彼女はキリストへの継続的な心の傾注により、夜も半睡状態にあったが、キリスト誕生の時間である深夜に目を覚まし祈ることが習慣となっていく[11]。この深夜の起床は『イエスの幼年期信心会の規則』でも取り入れられている。1682年に再び重い病気にかかり、「聖十字架称讃の祝日（９月14日）から聖十字架発見の祝日（５月３日）まで」続いた。それは彼女にとって浄化のための試練と理解され、病床で思うようにならない体を幼子のように預けきり、幼子の弱さと依存の神秘に浸透する体験でもあった[12]。痙攣が足から内臓に達し、ラ・コンブ神父から終油の秘蹟を受け、それからさらに痙攣は心臓にまで達したが、このときも死神に退散を命じる神父の祈りによって息を吹き返した。この病気の間、ラ・コンブ神父は貧しい病人のための施療院設立と、慈善奉仕に携わる婦人たちの愛徳会創設を企図し、ギュイヨン夫人は喜んで計画に加わり、資金援助や薬の提供を行った。施療院には12のベッドが備えられ、愛徳会の礼拝堂は聖なる幼子イエスに捧げられ、婦人３名が無料奉仕に携わった。「私は彼女たちに、私がフランスにいたとき守っていた小さな規則を与えた。彼女たちはそれを愛と慈愛とをもって行った。また、聖なる幼子イエスに捧げられた愛徳会の礼拝堂では、毎月25日を祝う礼拝も行われた。この日のために私たちは礼拝堂を完璧に飾り付けた[13]。」ギュイヨン夫人の『自伝』にはこう記されており、この「小さな規則」というのが『イエスの幼年期信心会の規則』の草稿のようなものであり、このようなかたちで女性たちに共有されたのだろうと考えられる。

Ｉ－３．『イエスの幼年期信心会の規則』

『イエスの幼年期信心会の規則』は1685年にリヨンで出版されるが、著者名は記されていない。幼子イエスへの献辞の中で、本規則は同じ愛と信心で結ばれた人々

---

[11] *La Vie par elle-même*, t. I, p. 440-441.

[12] *La Vie par elle-même*, t. I, p. 528.

[13] *La Vie par elle-même*, t. I, p. 548-549.

の省察を取り入れてまとめられたテクストであることが記されており、たしかに、本テクストにはこうした修道院的な匿名性こそふさわしいと感じられる。1705年にケルン（実際はアムステルダム）で出版された第２版は、初版と同様、無記名のままであるが、1712年、ピエール・ポワレがギュイヨン夫人のテクストとして『ギュイヨン夫人の霊的小論集』第２巻に収め、1720年と1790年に再版、1995年にギュイヨン夫人研究者マリー＝ルイーズ・ゴンダルが校訂編集した『祈りの手引き、ほか霊的著作』にも本テクストが収められている[14]。また、1685年に出版許可を与えた司教総代理が明かしているとおり、それは「一人の女性」によって書かれたものであり、祈りに関する部分はギュイヨン夫人の『短く簡単な祈りの手引き』と明らかに一致する部分もあり、やはり主としてギュイヨン夫人の手になるものだと考えられる。14章からなる本規則の構成と概要は次のとおりである。

１．イエスの幼年期にならう必要性について
２．本会への入会について
３．幼子イエスの内面について：無垢、祈り、身を委ねること
４．無垢について
５．祈りについて
６．誰しも祈りを行うことができること
７．祈りの実践
８．愛情による自由な祈りの試み
９．身を委ねることについて
10．イエスの幼年期の外面について
11．聖家族の子供たちの特徴
12．本会の実践

---

[14] *Règle des Associés à l'Enfance de Jésus, modèle de perfection pour tous les états*, tirée de la Sainte Ecriture & des Pères, par les réflexions de plusieurs personnes intérieures, Cologne, Jean de La Pierre, 1705（1re éd. Lyon, 1685）. *Les Opuscules spirituels*, Cologne, Jean de La Pierre, 1720（1re éd., t. 2, 1712）. *Le Moyen court et autres écrits spirituels : une simplicité subversive*, texte établi et présenté par Marie-Louise Gondal, Jérôme Millon, 1995.

13. 物的慈善行為について
14. 霊的慈善行為について

1．私たちは洗礼によって神の子となったが、神の掟に背き、神の秩序に反する生活を送っている。キリスト教徒として完徳の道を歩むため、イエスの幼年期にならう新たな霊的生活に入らなければならない。イエスの幼年期は、あらゆる神秘の中でもっとも愛すべきものであり、それにならう規則はたやすく、清らかで美しく、誰もが実践しうるものである。幼子イエスに内面と外面があり、内面においては神の子として父なる神とつながり、外面においては人の子として人間とつながっていたように、本規則も内的信仰生活（3-9）と外的実践面（10-14）の二部に分けられている。
2．アダムは自由意志によって神に背き、世に腐敗と無秩序をもたらした。新たなアダムたるイエスは留保なく神に身を委ね、神の意志以外のものは何も持たず、それゆえいかなる罪も不完全さも入り込む余地がなかった。キリスト教徒は自己を捨て去り、神に身を委ね、イエスの状態に身を置かなければならない。
3．幼子イエスの内面は、無垢、祈り、自己放棄からなる。いかなる罪にも汚されておらず、あらゆる不完全さを排除する無垢。イエスの魂を満たし、幼年期、眠り、活動の中にあっても決して途切れることのない、完成された祈り。父なる神の命令に対し、留保なく全面的に身を委ねること。「子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」（マタイ18章３節）とキリストご自身が言われたように、これら３つの状態に身を置かなければならない。
4．はじめに「無垢」(innocence)。幼子イエスにならう者は、告解と悔悛によってあらゆる罪から身を浄めなければならない。とはいえ、悔悛といっても、幼年期には厳しさではなく、純粋さと愛こそがふさわしく、肉体的苦行の実践より、内的生活の実践と愛による悔悛を行うこと。
5．次に「祈り」(oraison)。祈りは内的生活の要をなすものであり、すべての人が例外なしに祈りを行わなければならない。祈りとは神との霊的結合のことである。
6．心の中で神に語りかけること、それが祈りであり、誰にでも実践できるものである。

7．各自のレベルに合った方法で祈りを行うこと。外界のことから身を引き、内面に集中し、神の現前に身を置くこと。神を外に求めるのではなく、自分自身の中に求めること。神はまさにそこにおられる。

8．神の現存を感じとることができたら、心の中で愛を込めて神に呼びかけ、自由に語りかけること。「主よ！」、「父よ！」、「イエスよ！」――、こうした短くたやすい呼びかけの祈りをできない者があろうか？

9．最後に「身を委ねること」(abandon)。私たち自身のあらゆる心配や気がかりを脱ぎ捨て、幼子のようにすべて神の導きに身を任せること。過去は忘却に、将来は摂理に任せ、現在は神に捧げること。

10. イエスの幼年期の外面を特徴づけるのは、へりくだり、純真さ、依存である。ゆりかごの中のみどりごのように、貧しく、無一物で、与えられるものに満足し心静かに安らいでいること。単純な神の子となり、両親に従ったイエスのように従順になること。

11. 聖家族の子供たち（幼年期信心会員）は、修道服や住居や儀式によって区別されるのではなく、慎ましさ、沈黙、平安、穏やかさ、隣人への奉仕などによって区別される。

12. 実践すべき規則。毎日ミサに与かり、日に３度、三位一体と聖家族への祈りを行うこと。体力的かつ生活上問題のない者は、深夜と起床時、そして夕方食事の前か就寝時に祈りを行う。祈りの長さは各自の仕事や心の状態に応じて加減してよい。本信心会員は継続的な心の祈りが身についているため、口祷（声に出して唱える祈り）で荷を重くする必要はない。毎日欠かさず霊的読書を行う。霊的読書は食事の際に行えば、味覚の快楽とおしゃべりを避ける最良の薬となる。毎日、何かしらの手仕事か隣人への奉仕を行う。体力ある者は深夜に起きて祈りを行うが、それはこの時間に成し遂げられた救い主の受肉と誕生の神秘を讃えるためであり、キリストの使徒たちからこの習わしを受け継いだ初期キリスト教徒にならうものである。毎月25日は幼年期信心会にとって荘厳な祝日である。前日は大斎をし、24日と25日の間の深夜に１時間の祈祷を行い、25日には必ずご聖体を拝領する。秘蹟、とりわけご聖体拝領を頻繁に行い、年に一度黙想を行うこと。黙想の最良の時期は待降節であり、聖母マリアの胎内に隠され、口をきけない胎児であられたイエスを崇め、大沈黙のうちに過ごす。可能であれば大斎か小斎を

行い、少なくとも何かしらの節制を行う。

13. 物的慈善行為。裕福な者は多く施し、裕福でない者は少し施す。施すべきものを持たない者も、貧しい人を訪れるなど、体を使って奉仕する。貧しい人々を愛し、目の前にいる貧者を拒まず、外出できない貧者を訪問し、苦しんでいる人にあらゆる援助を与えること。

14. 霊的慈善行為。司祭は人々を祈りと内的生活に引き入れ、人々の心にキリストを住まわせるよう努めなければならない。外的信心行為の強要ではなく、内面に働きかけることができれば、キリストが穏やかに浸透し、教会は一新されるだろう。心の祈りを教えるため、特別な公教要理を行うこと。理性や方法を必要とする頭で唱える祈りではなく、心で唱える愛の祈りである。

幼子イエスがその揺りかごから求めているのは、人々が心を開き、心の中にイエスを受け入れ、信仰と愛とをもってイエスのそばにとどまり続けることである。たとえ日々の生活の中で、一時的に心が離れることがあっても、たえずイエスのもとに帰り、常に探し求め、神への愛に満ちた視線を持ち続けること。わが身のことは天に任せ、イエスの幼年期にならって歩むことができれば、完徳に近づくことができるであろう。

以上、14章からなるテクストであるが、そこには、カトリックの伝統的な公教要理にならい、祈り、秘蹟、慈善事業に関する教えがまとめられると同時に、幼年期信心会特有の規則が盛り込まれている。外的規則に関する第12章は、イエスの幼年期にならう人々が具体的にどのような信心行為を行っていたか、一時代の信仰生活を示す興味深い記録ともなっている。内的祈りの方法を教えながら、幼子イエスを祈りの中心に置き、ご降誕の秘蹟をとりわけ大切にするこうした信仰生活のあり方は、自然の本性として子供を愛する女性たち、修道女たちにとりわけふさわしいものだったと言えよう。

Ⅰ-4．幼子イエスの信心、その後

ギュイヨン夫人における幼子イエスの信心は、それから10年後、1694年に、重要な展開を見せることになる。1686年、パリに移ったギュイヨン夫人は監禁の憂き目に遭ったあと、マントノン夫人（Marquise de Maintenon, 1635-1719）によって

サン＝シールの学校に迎えられると同時に、フェヌロン（François de Salignac de La Mothe-Fénelon, 1651-1715）との交流も始まっていた。ギュイヨン夫人が教える内的祈り、内的信仰のあり方は、宮廷でも多くの支持者を集め、一種の霊的サークルを形成していた。ルイ14世（1638-1715）も信仰心の篤い王ではあったが、ギュイヨン夫人やフェヌロンの神秘思想には、ボシュエ（Jacques-Bénigne Bossuet, 1627-1704）同様、警戒の目を向けていた。一方で、ギュイヨン夫人のもとに集まった宮廷人たちは、ルイ14世治下の、成熟し、年老いた文化社会に倦み疲れ、若く聡明なブルゴーニュ公のルイ（1682-1712）――ルイ14世の孫にあたり、後継者となる予定であった王太子――が君臨する新しい時代の到来を心待ちにしていた。フェヌロンが家庭教師をつとめたブルゴーニュ公を中心に、フェヌロンとギュイヨン夫人が指導者となり、幼子の道を実践する「ミシュラン」という名の信心会が形成されたのである。「ミシュラン」という名は大天使ミカエルから取られているが、それは、大天使ミカエルの祝日（９月29日）に朗読される福音書がまさに、「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」、「身を低くし、この子供のようになる者がもっとも偉大な者である」（マタイ福音書18章１-10節）というイエスの言葉から取られているからである[15]。ルイ14世がこのサークルを危険視したのももっともなことではあった。幼子の信心を抱く王がフランスに君臨すれば、フランスの政治と教会は大きく変わっていただろう。しかし、1712年、ブルゴーニュ公は天然痘にかかり、祖父よりも早く29歳で亡くなってしまう。ブルゴーニュ公即位の希望が失われ、失意のフェヌロンも1715年にカンブレーで亡くなり、ギュイヨン夫人も1717年にブロワで生涯を閉じている。

こうして、17世紀に大きな霊的盛り上がりを見せた幼子イエスの信心は政治の表舞台を去る。しかし、勢いを失ったかに見えたその信心は、その後も修道院や一般信徒の信仰生活の中で継承されていく。1859年、ブルゴーニュ地方ではレーヌ・アンティエ（Reine Antier, 1801-1883）によってショファイユの幼きイエズス修道会（Congrégation des Sœurs de l'Enfant-Jésus de Chauffailles）が創設され、日本にも1877年、フランス人修道女４名が派遣されて礎が築かれ、現在も日本だけで18の修道院が活動している。リジューの幼きイエスのテレーズ（Thérèse de l'Enfant-

[15] *Missel quotidien et vespéral*, p. 1988-1995 ;『毎日のミサ典書』p. 1192-1196.

Jésus, 1873-1897、跣足カルメル会）は、その名のとおり「小さき者の道」を歩み、リジューのテレーズを模範としたマザー・テレサ（神の愛の宣教者会、1910-1997）にもその精神が受け継がれていく。「幼子イエスにならう」信仰のありようは、中世以来、あるいはギュイヨン夫人によれば、初期キリスト教時代から続く伝統に連なるものであり、イエスへの愛の流れの一形態として今日まで脈々と受け継がれているのである。

Ⅱ．バルザックにおける幼子イエス

ギュイヨン夫人の信仰の中心にあった幼子イエスであるが、ギュイヨン夫人を愛読していたバルザックにその信心は継承されていたのだろうか。バルザックはギュイヨン夫人の内的信仰のあり方に深い共感を抱いていたのであるが、そのギュイヨン夫人はまた一方で、毎月25日を特別に祝ったり、クレッシュを大切にしたりと、外的信心行為を熱心に実践した一面があった。バルザックは『イエスの幼年期信心会の規則』が収められている『霊的小論集』を所有していたと見られるほか、幼子イエスへの愛と崇敬はギュイヨン夫人の複数の作品で表明されているため、こうした信心を当然把握はしていただろう。しかし、幼子イエスへの信心という、女性的、母性的な信心を、バルザックがどの程度共有していたのかは明らかでない。生まれてすぐ里子に出され、８歳から14歳までヴァンドームの寄宿学校に入れられ、母の愛を受けずに育ったバルザックが、「私には母も、幼年期もなかった」[16] とハンスカ夫人に打ち明けているのを見ると、毎年クリスマスに家族でクレッシュを眺めるといった温かい思い出はなかったのではないかとも思わされる。しかし５歳から８歳まで、自宅からル・ゲの寄宿学校に通学生として通っていた期間は家族で過ごしていたはずで、クリスマスに教会に出かけたこともあったのではないかと推測される。少なくとも『セラフィタ』（1833-1835）では、孤独な祈りの生活を送るセラフィタが唯一教会に出かけるのがクリスマスの日とされており、この祝日が一年でもっとも大切な日と認識されている。

９歳であの子は祈りの状態に身を置くようになりました。祈りが彼女の生活な

[16] « Je n'ai eu ni mère, ni enfance » (*LH*, t. I, p. 625, 20/12/1842).

のです。あなたはクリスマスにここの聖堂で彼女をご覧になりましたね。その日が唯一、彼女が聖堂にやってくる日なのです[17]。

物質的礼拝の段階を越え、静寂と沈黙のうちに行われる内的祈り、神秘的瞑想の状態に生きるセラフィタが、人々の中に身を置く苦痛を押して教会に出かけていくのがクリスマスであり、それは、キリストの受肉の神秘を愛し、幼子となられたイエスのご降誕を人々とともに喜び祝うセラフィタの例外的行いであると言える。

Ⅱ－１．初期テクスト「ご降誕」

『セラフィタ』執筆の10年前、バルザックはキリスト誕生をテーマにした小さな詩を書いていた。「ご降誕」（La Naissance）と題されたこのテクストは、ルカ福音書に記された羊飼いたちの場面を再現した素朴な作品である。

ご降誕

羊飼いたちは野原にいた…。羊の群れは、地が揺れるのを感じて起き上がり、恐怖に打たれ、嵐の気配を感じたときに見せる沈んだ様子をしていた。羊飼いたちはこうして、喜びの結果起こったことに恐怖を抱いた。
そうするうち、周囲の山に雲がかかり、谷間を覆った。天からかすかな調べが聞こえてきた…。羊飼いたちは遠くに聞こえる音楽に耳を澄ませ、注意を傾けた。澄んだ音は雲から発していた。やがてその音楽は彼らの心の中で愛のように大きくなった。
一つの声が伝わり、彼らに言った。「地上の王を讃えに、ベツレヘムに行きなさい。」その声に従い、羊飼いたちは沈黙のまま羊の群れを捨て、この素朴な男たちは同じ感情に動かされ、ベツレヘムに向かった。彼らの一行はただ一人の人間のようだった。
彼らは馬小屋に入り、超自然的な光を見た。そして、飼い葉おけを見て言った。「ほら、ここにいるよ。」彼らは沈黙のうちにひざまずき、この神秘的な運

[17] *Séraphîta, CH*, t. XI, p. 787.

命を感嘆して眺めた[18]。

聖書を題材にしたこの作品は、プレイヤード版の初期作品集に収められているが、バルザックがこの詩を書いた経緯は明らかにされていない。推定されているのは、この思いがけないテクストが1822年～1823年に書かれた詩的作品群の一つであるということ、より限定すれば『祈祷論』（1823-1824）と同時期の1823年の後半に書かれたものらしいということである[19]。たしかに、「ご降誕」と『祈祷論』との間には、天の声を聴き、超自然的光に立ち会うといった神秘的描写が共通して見られる。もう一つ、このようなテクストが書かれた背景として重要だと思えるのは、ベルニー夫人と出会い、愛を打ち明ける時期と重なるものであるということである。バルザックは1821年６月、22歳のときにベルニー夫人と出会い、1822年５月に愛の告白をしている。そのため、愛に満ちたこの素朴な作品は、母親の愛にも代わる大きな愛を得たバルザックが、その至福の中で書き上げた作品だと思われるのである。

野宿をしていた羊飼いたちは、大地が揺らぐのを感じ、天から聞こえてくる音楽に耳を傾ける。その音楽は彼らの心の中で「愛のように」大きくなり、救い主の誕生地「ベツレヘムに行きなさい」という声が聞こえてくる。彼らはその声に従い、沈黙のまま、羊の群れを捨てて出発する。希望の光に満たされた彼らは夜道を急ぎ、ベツレヘムの馬小屋にたどりつく。中に入ると、超自然的な光、愛そのものであるみどりごが見出される。彼らはひざまずき、地上に降りてきた愛を見つめ、愛の神秘に包まれる。『谷間の百合』（1835）にも、モルソフ夫人に愛を告白するフェリックスが、飼い葉おけに眠る聖なる幼子を自分たちの愛の象徴として語る場面があり、『谷間の百合』がバルザックの伝記的要素の濃い、ベルニー夫人をモルソフ夫人のモデルとした作品であるだけになおさら、意味深い符合であるように思われる[20]。

さらに、この詩の内的意味を汲み取ると、幼子の心を反映する素朴さ、貧しさ、

---

[18] « La Naissance » (Les Essais poétiques de 1822-1823), *OD*, t. I, p. 1087-1088.

[19] Notes par Roland Chollet et René Guise, *OD*, t. I, p. 1737.

[20] *Le Lys dans la vallée*, *CH*, t. IX, p. 1034.

静けさと、天の声に従う羊飼いたちの従順さ、みどりごの前でひざまずく謙遜の心とが表されており、神秘思想のエッセンスのようなテクストとなっている。天の声を聞いた羊飼いたち、この素朴な、素直な男たちはその言葉に従い、羊の群れ、つまり地上の事柄を捨て、ただちに、沈黙のうちに、聖なる場所へと出発する。馬小屋には、貧しく小さき者となって地上に生まれた神の子が寝かされている。馬小屋にたどりつき、光を見出した彼らは、静かにひざまずき、清貧と謙遜と従順そのものの姿となって、幼子を見つめ、祈りに専心する。

ここにはギュイヨン夫人が教える神秘思想の複数の要素が凝縮されているが、この詩でとりわけ際立っているのは、ルカ福音書の記述がそうであるように、天から聴こえてくる音楽と天使の声という聴覚的側面である。天の声に耳を傾けること、聖なる沈黙の中で声に聞き入ること、これらは祈りの方法について語るギュイヨン夫人とバルザックがともに重視するものである。『イエスの幼年期信心会の規則』（７章９節）では、祈りの中で「内的沈黙のうちにとどまり、神の声に耳を傾ける」べきことが教えられており、『短く簡単な祈りの手引き』（14章１節）でも、「言葉を受けとるためには、耳を傾け、聞かなければならない」ように、「内部に語りかけようとする御言葉に、魂は注意を傾けなければならない」ことが説かれていた。バルザックもまた『祈祷論』で、読者に向かって「御言葉の意味を見出すために必要な静寂をもってこの作品に向かい、注意深く耳を傾けていただきたい」と語りかけている[21]。

このように、ギュイヨン夫人とバルザックは神の声、御言葉の意味を聞きとるため、静寂の状態に身を置き、注意深く耳を傾ける必要を強調している。それは、内的信仰の一側面を示すものであり、ギュイヨン夫人が繰り返し模範として参照し、バルザックも『祈祷論』の中で暗示的に論じている、キリストの足元でその教えに耳を傾けたマリア（ルカ福音書10章38-42節）によって象徴されるものである[22]。「主の足元で沈黙と休息のうちにとどまり、主のみに思いを集中し、主を崇め愛することだけで満足し」、「神を受け入れることができるよう、大いなる無となりきる」マリアである（『イエスの幼年期信心会の規則』７章10節）。「ご降誕」の羊飼いたちは、

---

[21] *Traité de la prière*, *OD*, t. I, p. 610.

[22] *Traité de la prière*, *OD*, t. I, p. 604-605.

「羊の群れを捨て」ることで、外的な、マルタの部分を脱ぎ捨て、完全に内的な存在となって神の瞑想と祈りに沈潜するマリアのヴァリエーションともなっている。

Ⅱ－２．幼子イエス像と馬小屋

ギュイヨン夫人は幼子イエス像を大切にしていたが、バルザックにおいてはどうであっただろうか。『人間喜劇』の中では、『村の司祭』（1837-1845）と『田舎医者』（1832-1833）に幼子イエス像が登場する。『村の司祭』では、モンテニャックの司祭館の描写の中で、客間の暖炉の上に、二つの燭台が置かれ、燭台の間にガラスケースに入った蝋細工の幼子イエス像が飾られている。また、ヴェロニックが馬小屋の飼い葉おけに腰を下ろしている場面があり、ここでは馬小屋のイエスという直接的な参照ではないものの、イエスの生まれた貧しく、素朴でつつましい場所というイメージが重なり、ヴェロニックが公開告白と間近に迫る死を前に、自らを小さき者とし、罪の浄化に向けて重要な一歩を踏み出す場として用いられている[23]。

『田舎医者』では、幼子イエスとキリスト降誕の場面が物語と深く絡み合って登場する。まず、物語冒頭、騎兵将校のジュネスタスが、グルノーブルからグランド・シャルトルーズに向かう途中、農家で牛乳を飲ませてもらう場面である。そこは、５人の孤児を育てる老婆の家で、やはり暖炉の上の飾り棚に、幼子イエスを抱いた聖母の着色石工像が置かれている。

> ジュネスタスは火のない大きな暖炉のそばに腰を下ろしたが、暖炉の飾り棚の上に、幼子イエスを腕に抱いた、着色石膏の乙女マリア像が見られた。崇高な標章！[24]

子供を失い、夫も２年前に亡くし、苦労のために老婆のようになったこの38歳の女が孤児たちを育てている話を聞いたジュネスタスは、その自己放棄と労働の生活に感嘆する。そして、幼子を抱くマリア像がこの家のシンボルであるという意味が説明される。

---

[23] *Le Curé de village*, *CH*, t. IX, p. 713, 842.

[24] *Le Médecin de campagne*, *CH*, t. IX, p. 392.

「なんという自己放棄と労働の生活だろう！」と騎兵は思った。
イエス・キリストがお生まれになった馬小屋にも値するこの屋根の下では、母親としてのもっとも困難な務めが、誇らしさもなく、快活に遂行されていた。もっとも深い忘却の中に埋もれた何という心！何という豊かさ、何という貧しさ！兵士というものは、木靴をはいた崇高さ、ぼろをまとった福音書の中に存在する卓越したものを、ほかの人間以上に評価しうるものである。よそには、装飾と刺繍を施され、きれいに裁断され、毛織物や絹や繻子に包まれた聖書があった。しかしここにはたしかに聖書の精神があった。イエス・キリストが人となられたように母となったこの女性を見ると、何か宗教的な天の意志を信じずにはいられなかった。彼女は捨て子たちのために落穂を拾い、苦労し、借金し、計算を間違えながら、母となったために破産していることを認めようとしなかった。この女性を見ると、この世の善人と天上の知性との間に何かきっと共感作用が存在することを認めなければならなかった。それゆえジュネスタス少佐は、彼女を眺めて頷いた[25]。

ここでは、キリストの生まれた馬小屋にも比される貧しい家で、キリストが人となられたように、孤児を育てる母親の役割を引き受けた女性の姿が描かれ、貧しさの中で純粋な福音書の精神が実践されている。『祈祷論』と『セラフィタ』で神秘的祈りと内的信仰生活のあり方を描いたバルザックは、同時に社会に向かい外的活動に向かう衝動、信仰の外的側面を描かなければという思いに駆られており、『セラフィタ』と同時期に『田舎医者』を執筆している。ギュイヨン夫人の『イエスの幼年期信心会の規則』は内的実践と外的実践の二面からなっていたが、同じようにバルザックも、内的信仰生活とともに慈善事業の実践という側面の必要性を感じており、『田舎医者』はこの両面が実現された作品だったと言えるだろう。その崇高な精神は晩年に『現代史の裏面』において、バルザックの遺言のようなかたちで残されることになる。

[25] *Le Médecin de campagne*, *CH*, t. IX, p. 394-395.

Ⅱ－３．*Pater noster*（天にましますわれらの父よ）と « ô, mon père ! »

『田舎医者』では、冒頭で幼子イエス像が飾られ、馬小屋のような家で孤児を育てる女性の姿が描かれた後、物語後半、ベナシス医師の告白の場面で父と子のエピソードが語られる。そこでは、若き日のベナシスとの間に生まれた子供を一人育て、息を引き取ったあわれな女性のこと、その後、ベナシスは残された息子を引き取って育ててきたことが語られる。ここで『田舎医者』のモチーフをなす祈りが現れる。

> ［…］私はこの子に、目が覚めたら私のベッドにお祈りをあげにくるよう習慣づけていました。この子の溌溂とした清らかな口で唱えられる、素朴で純粋な「パテル・ノステル」(*Pater noster*) はどんなに快い感動を私に与えたことでしょう。そしてまた、どんなに恐ろしい感動も与えたことでしょう！ある朝、「天にましますわれらの父よ…」（*Notre père qui êtes aux cieux...*）と唱えたあとで中断し、「どうして“われらの母よ”じゃないの？」と私に尋ねました。この言葉は私を打ちのめしました[26]。

ベナシスが我が子に教え、毎朝唱えさせる「パテル・ノステル」、主祷文と呼ばれる祈りは、キリスト自らが口伝えで弟子たちに教えた祈りで（マタイ６章、ルカ11章）、キリスト教徒が日々唱えるもっとも基本的で重要な祈りである。しかし、バルザックにおいてはギュイヨン夫人の影響とも絡むさらに別の意味合いがあるように感じられる。ギュイヨン夫人は、長い祈りや定型の祈りを繰り返す必要はないと考え、すべての祈りはキリストが教えた「パテル・ノステル」だけで十分であると考えていた。バルザックも、『ルイ・ランベール』において定型の祈りへの無感動を打ち明けていたが、この点はバルザックがギュイヨン夫人に深い共感を抱いた部分でもあった。

主の祈りは父なる神への呼びかけで始まるが、ギュイヨン夫人とバルザックは « ô mon père ! »という父への呼びかけからなる祈りの力を信じていた点でも共通していた。こうした短い呼びかけからなる祈りを、カトリック用語で射祷（しゃとう）と言う

---

[26] *Le Médecin de campagne*, *CH*, t. IX, p. 553.

が、形式的な乾いた祈りに心を込めることができず、むしろ苦痛を感じるバルザックは、このひとことの呼びかけが持つ力を強調していた。魂から発せられるこうした呼びかけこそ、何にもまさって父なる神に届く祈りであると確信していたのである。

> ［…］ただひとことの祈りは一つの祈り全体を唱えるよりも、しばしば大きな効果をもたらす。聖テレサは、「おお、わが父よ！」という、神に向けて発せられたあの崇高な間投詞の中に、一週間の黙想に必要なものを見出したのである[27]。

このように『祈祷論』では、聖テレサのものとして、父なる神への呼びかけが論じられている。聖テレサとされているが、バルザックは故意にか無意識にか、アビラの聖テレサとギュイヨン夫人を取り違えることがあり、それはたしかにこの二人の女性の思想と傾向に非常に似たものがあるためでもあり、あるいはまた、キエティスムのレッテルを貼られたギュイヨン夫人の名を出すことを控えることがあったのかもしれない。たとえばこのテクストは、ジャン・トマシーという敬虔なカトリックの友人を最初の読者として意識して書かれており、ギュイヨン夫人ではなく、カトリック教会からも認められている聖テレサを参照したのかもしれない。いずれにしても、父なる神への呼びかけをアビラのテレサ以上に強調したのはギュイヨン夫人であった。

ギュイヨン夫人は、曜日ごとに神を異なるイメージで思い描き黙想する祈りを教えており、火曜日が神を父とみなし呼びかける日とされ、子供の心で父なる神に祈ることを教えていた。

> 神を父親のようにみなしなさい［…］。神に向かってしばしば「父よ、父よ」と言いなさい。［…］泣き叫び、「お父さん」と言い、父の心に語らずして多くの事柄を理解してもらうほかない小さな子供のように。私たちにしても同じことです。このただひとことを叫ぶことで、神は私たちの声を聞き、祈りを聞き

---

[27] *Traité de la prière*, *OD*, t. I, p. 608.

> 届けてくださいます。[…] わが娘よ、愛しなさい。これほど善良なる父を、情熱をもって愛しなさい。そして、子供のよき性質を決して失ってはいけません[28]。

また、『幼年期信心会の規則』でも、ほかのことを何も知らなくても、主の祈りだけで十分であると述べている。

> おお、わが兄弟、わが姉妹よ！あなたが誰であれ、祈りの習慣をまだ持たないとしても、「パテル・ノステル」はご存知でしょう。ほかのことを何も知らなくても、祈るにはそれだけで十分なのです[29]。

このように、定型の祈りに重きを置かないギュイヨン夫人とバルザックが、ただ一つ例外としたのが主の祈りであり、父なる神への呼びかけであった。『田舎医者』では、ベナシスが毎朝子供に唱えさせる祈りとしてだけでなく、村人の葬儀の場面で、村人たちが口々に「パテル・ノステル」を唱える場面が描かれている。

> 通りがかる人はみな中庭に入ると、遺体の前にやってきてひざまずき、主祷文を唱え、棺の上に数滴の聖水をふりかけるのだった[30]。

この風景から、ベナシスの活動によって息づく共同体の村人たちが、主祷文によって一つに結ばれていることが感じとれる。そしてこの慈善の物語は、ベナシスの死によって閉じられるが、そこで再びこの祈りが現れる。

> 至高善なる神に
> 善良なるベナシス氏、
> ここに眠る。

---

[28] *Instruction chrétienne d'une Mère à sa Fille*, 1720, § II, p. 420-421.

[29] *Règle des associés à l'Enfance de Jésus*, 1720, VI, 5, p. 373.

[30] *Le Médecin de campagne*, *CH*, t. IX, p. 444.

すべての者に
「われらの父よ」*NOTRE PÈRE*
氏のために祈り給え！[31]

このように、ベナシスがただ一つ、定型の祈りとしてわが子に教え日々唱えさせたのが「パテル・ノステル」の祈りであり、村人もまた死者のために唱え、村の福祉に尽くしたベナシス医師の冥福を祈る村人の意を汲んだ司祭が彼の墓石に刻み、村人が彼のために唱え続けるのがこの祈りであり、『田舎医者』のモチーフとして流れている。あらゆる祈りのエッセンスとして「パテル・ノステル」、さらには父なる神への呼びかけに回帰し、純粋なキリスト教精神を目指していくその姿には、ギュイヨン夫人の説いた幼子の心との合流が見られ、と同時に、バルザックの中で血肉と化したそれはもはやギュイヨン夫人を感じさせることもなく、『田舎医者』、『村の司祭』、『現代史の裏面』へと発展し、結実していったとも思えるのである。

おわりに

本論では、ギュイヨン夫人における幼子イエスの信心を考察し、ギュイヨン夫人の神秘思想を霊的糧としていたバルザックがどのように幼子イエスを描き、その精神を結実させたかを見てきた。「ご降誕」の詩は、その素朴さ、貧しさ、静けさ、従順と謙遜によって、幼子の心と、愛に向かう神秘が歌われたテクストとなっていた。『田舎医者』では、馬小屋に比される貧しい屋根の下で、孤児たちの母となり奉仕する女と、村の福祉に尽くすベナシスの姿があり、主の祈りに包まれ導かれる共同体の風景が描かれていた。ギュイヨン夫人とバルザックは内的祈りのあり方を説いた点で緊密に結び付いているが、両者はさらに、父なる神への呼びかけ、「パテル・ノステル」の祈りでつながっていた。ギュイヨン夫人の人生は、幼子イエスを愛の中心に据え、貞潔、清貧、従順の信仰生活を内外両面において実践していくものであった。そしてバルザックは、純粋なキリスト教精神を探し求め、内的信仰と外的信仰の同時的実現を目指す中で、『田舎医者』という崇高な物語を実現したのである。

---

[31] *Le Médecin de campagne*, *CH*, t. IX, p. 602.

参考文献

【ギュイヨン夫人の作品】

GUYON, Jeanne-Marie, *Règle des Associés à l'Enfance de Jésus, modèle de perfection pour tous les états, tirée de la Sainte Ecriture & des Pères, par les réflexions de plusieurs personnes intérieures*, Cologne, Jean de La Pierre, 1705（1re éd. Lyon, 1685）.

— *Les Opuscules spirituels*, Cologne, Jean de La Pierre, 1720（1re éd. 1704–1712）.

— *Le Moyen court et autres écrits spirituels : une simplicité subversive*, texte établi et présenté par Marie-Louise Gondal, Jérôme Millon, 1995.

— *La Vie par elle-même, et autres écrits biographiques*, édition critique avec introduction et notes par Dominique Tronc, Honoré Champion, 2001 ; nouvelle éd., 2 vol., 2014.

— *Correspondance,* t. 1. *Directions spirituelles* ; t. 2. *Années de combat* ; t. 3. *Chemins mystiques*, édition critique établie par Dominique Tronc, Honoré Champion, 2003–2005.

— *Œuvres mystiques*, édition critique avec introductions par Dominique Tronc, Honoré Champion, 2008.

—『奔流』村田真弓訳、『キリスト教神秘主義著作集 第15巻 キエティスム』鶴岡賀雄、村田真弓、岡部雄三訳、教文館、1990.

【バルザックの作品】

BALZAC, Honoré de, *La Comédie humaine*（*CH*）, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976–1981.

— *Œuvres diverses*（*OD*）, t. I, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1990.

— *Lettres à Madame Hanska*（*LH*）, éd. établie par Roger Pierrot, Robert Laffont, « Bouquins », t. I（1832–1844）, 1990.

—『田舎医者』新庄嘉章、平岡篤頼訳、『バルザック全集』４巻、東京創元社、1973.

—『村の司祭』加藤尚宏訳、『バルザック全集』第21巻、東京創元社、1975.

【ミサ典書、聖書】

La Bible, traduction de Louis-Isaac Lemaître de Sacy, préface et textes d'introduction établis par Philippe Sellier, Robert Laffont, « Bouquins », 1990.

Missel quotidien et vespéral, par Dom Gaspar Lefebvre, Abbaye de Saint-André, Bruges,

Desclée de Brouwer, 1924.
『毎日のミサ典書』Federico Barbaro訳編、ドン・ボスコ社、1969（初版1955）.
『聖書』Federico Barbaro訳、講談社、1996（初版1980）.
『聖書』新共同訳、日本聖書協会、2009（初版1987）.

【事典／コンコルダンス】

Dictionnaire de spiritualité, Beauchesne, t. 4, 1960, « Enfance de Jésus（Dévotion à l'）», p. 652-682 ; « Enfance spirituelle », p. 682-714.
KIRIU, Kazuo, *Vocabulaire de Balzac* : http://www.v2asp.paris.fr/commun/v2asp/musees/balzac/kiriu/depart.pdf
LAROUSSE, Pierre, *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle*, 1866-1879 ; Genève, Slatkine Reprints, 1982.
上智大学編纂『カトリック大辞典』、冨山房、1940-1960、全５巻.
上智学院新カトリック大事典編纂委員会編集『新カトリック大事典』、研究社、1996-2009、全４巻.

【研究書／論文】

AEGERTER, Emmanuel, *Madame Guyon : une aventurière mystique*, Hachette, 1941.
GONDAL, Marie-Louise, et al., *Madame Guyon [Rencontres autour de la vie et l'œuvre de Mme Guyon]*, texte établi et présenté par Jérôme Millon, 1997.
GUERRIER, Louis, *Madame Guyon, sa vie, sa doctrine et son influence, d'après les écrits originaux et des documents inédits*, Orléans, H. Herluison, 1881.
LOSKOUTOFF, Yvan, *La Sainte et la fée, dévotion à l'Enfant Jésus*, Droz, 1987.
OSUGA, Saori, *Séraphîta et la Bible*, Honoré Champion, 2012 [Madame Guyon : p. 228-234]
THOUVENOT, France, *Hommage à deux grandes dames de Montargis : Renée de France, Madame Guyon*, Les Amis du vieux Montargis, 1994.
大須賀沙織「バルザックにおける女性神秘思想家―ギュイヨン夫人と内的祈り」、『フランス語フランス文学研究』n° 109、2016、p. 123-138.
村井文夫「ギュイヨン夫人の「生涯」（I）―ある神秘家の自伝をめぐって 」、『高岡法科大学紀要』2、1991、p. 159-181.